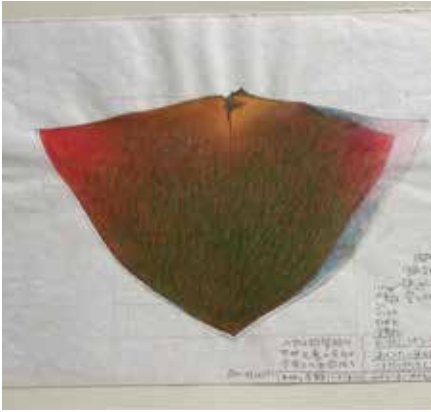


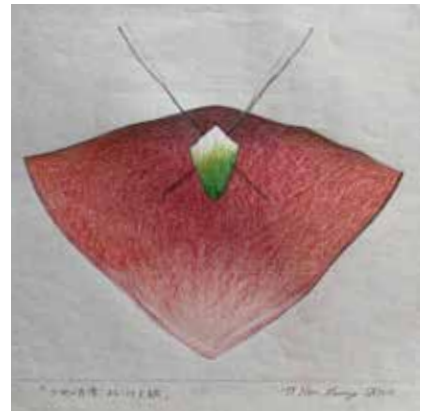
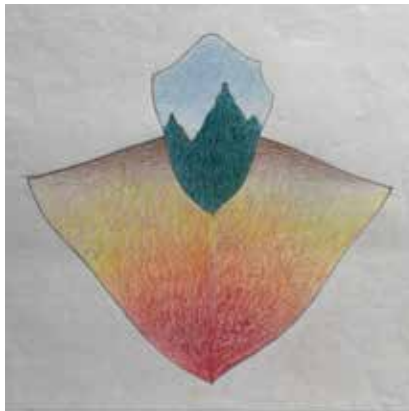
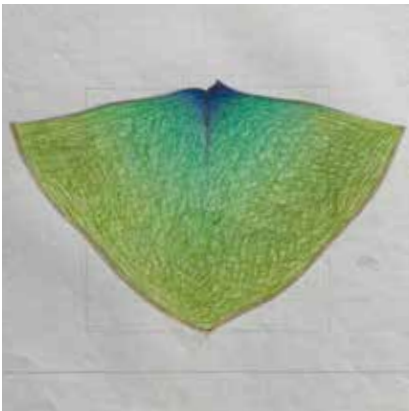


ベタな物質的な大地と虚の余白の空間との中間位の処に持って行く。

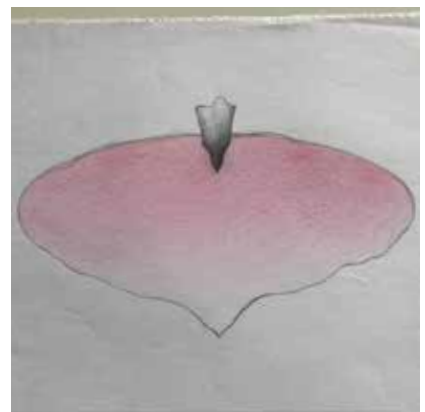
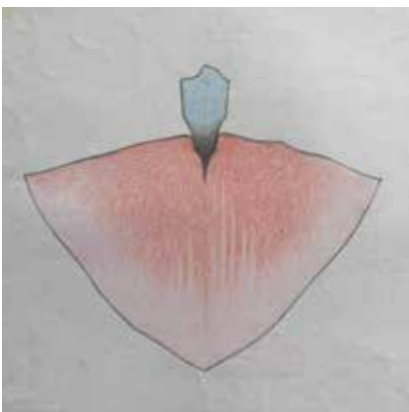
微妙なグラデーションに依る地肌を作り、タッチによって徐々に登りつめながら。

いくつかの色彩でベースの大地と分離しないように、しかしベタツとした平べったい単なる板状のものにはなり切ってしまうないように。

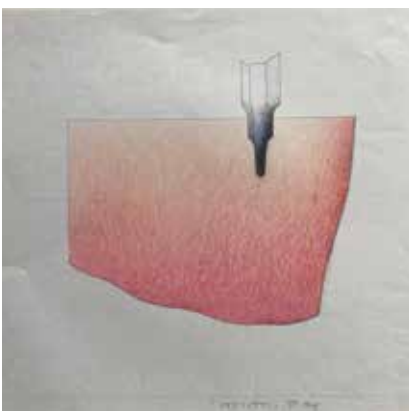
大地と分離してはしまわないけれど、うごめきを忘れない。



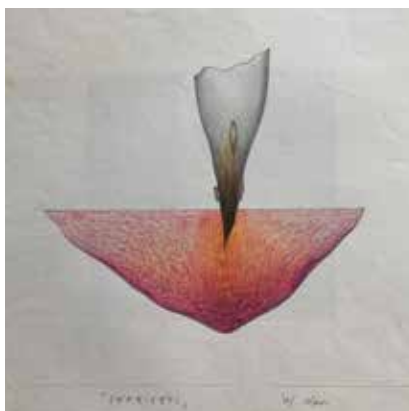
「大地の肖像・あるいは天網」 '99 Nov.



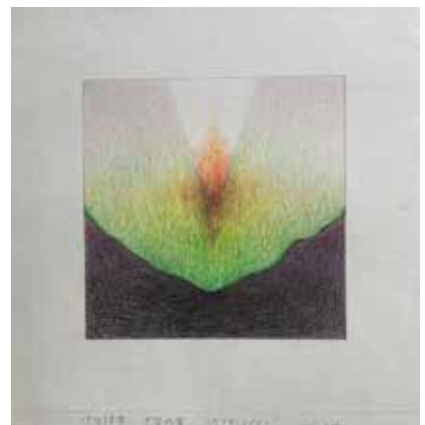
「大気圏」 '99 Jan.



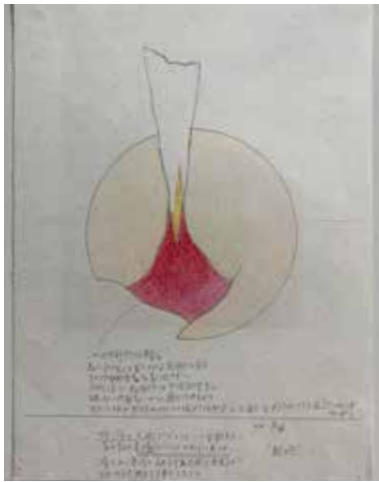
「イザナギイザナミ」 '98 May



「イザナギ・イザナミ」 '01 Nov.



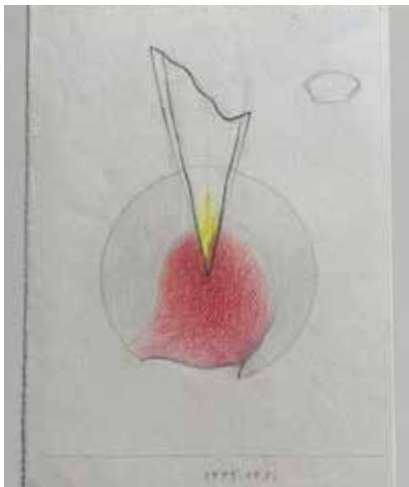
伊弉諾尊・伊弉冉尊 “イザナギ・イザナミ”
伊弉那岐命・伊邪那美命 “イザノ・イザハメ”
'01 Oct



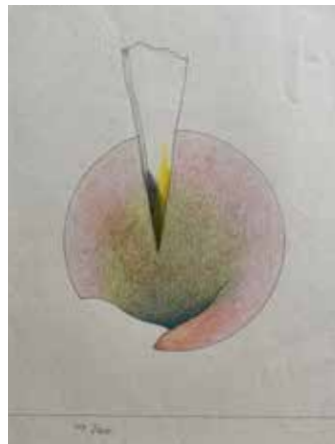
これは内部的な要素を表に引き出して来たような彩色だと思う。その内部的要素を表に出さずに自然体で表面だけで成立させたら見えない内部をいかに感じさせるかと云うことの方が（立体やレリーフの場合）自然だしまっ当だしよりレリーフ作品らしいのではないか。

“歌垣” '04 Feb.

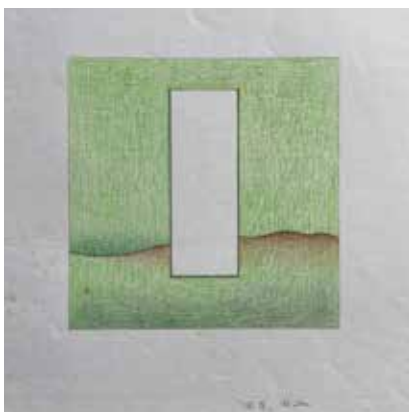
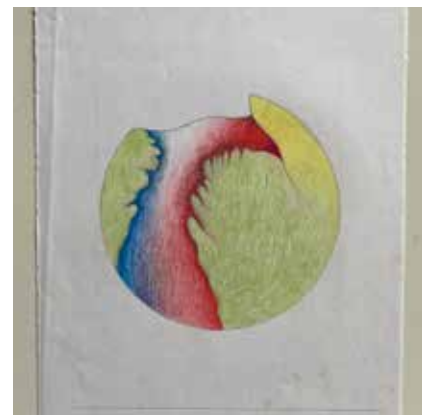
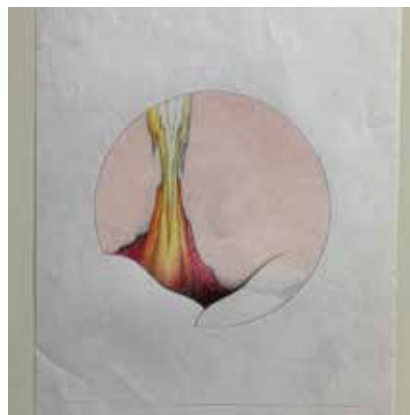
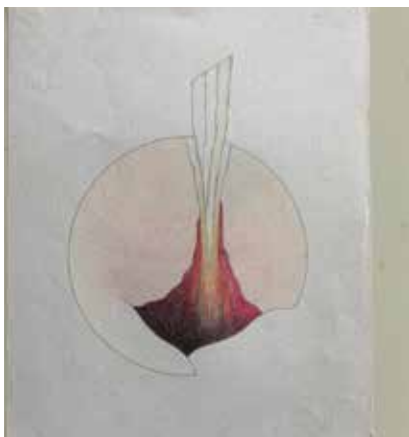
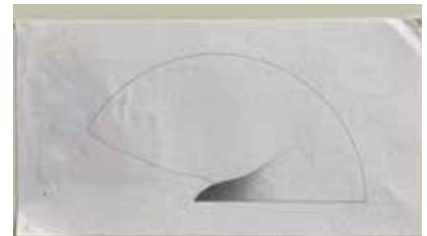
始源の大地（ではなくてもいい受動的に受け取める）場としてふさわしい色は、虚であり実存でもある宇宙空間（闇黒）から母なる大地まで（黄土）まで。



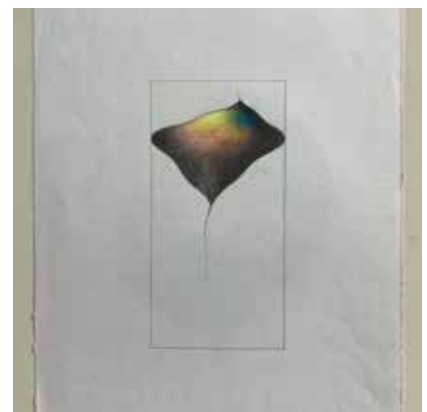
イザナギ・イザナミ

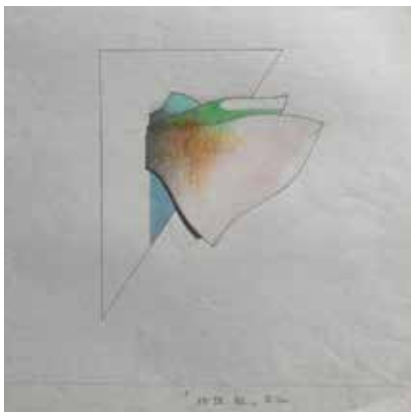


'04 Janu.

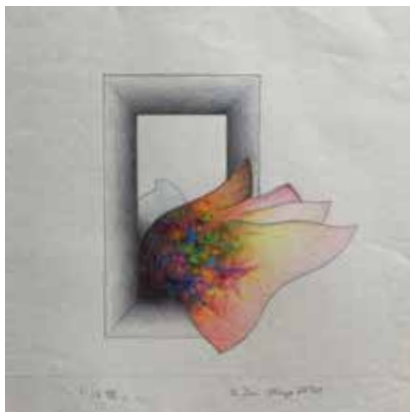


埋葬 '96.Dec

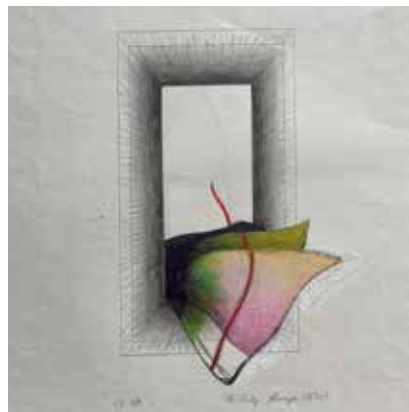




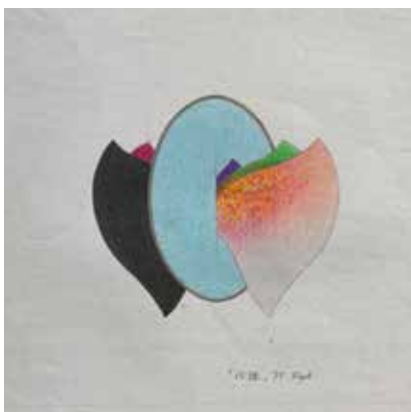
「伝説・敲」 '92 Nov.



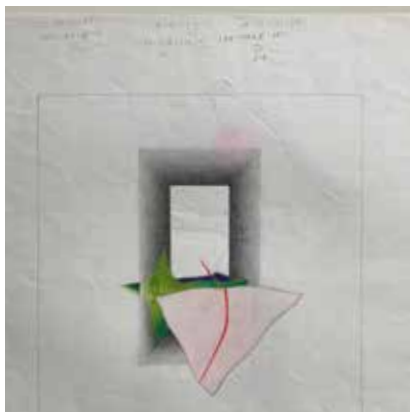
「岬にて」 '94 July



「伝説」 '96 July



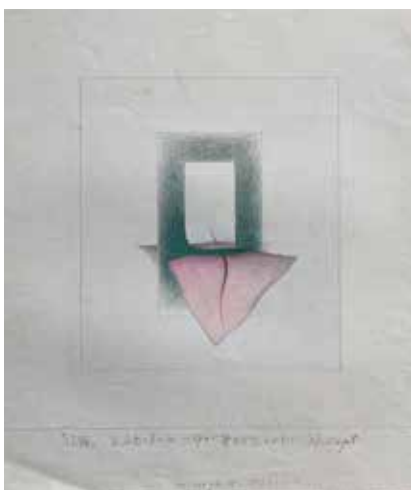
「伝説」 '97 Sept.



「伝説」 '01 Aug.



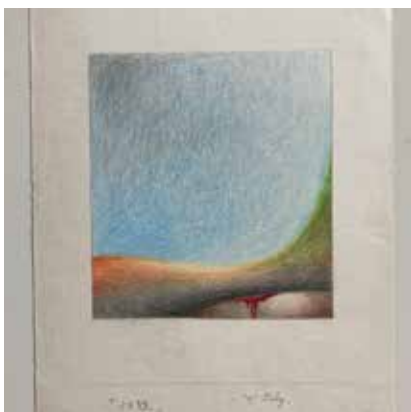
「伝説」 '01 Aug



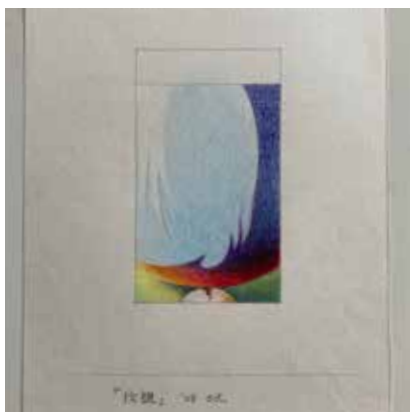
「伝説」“乳白色の光の中、一切が夢まぼろしのような” '01 Sept.



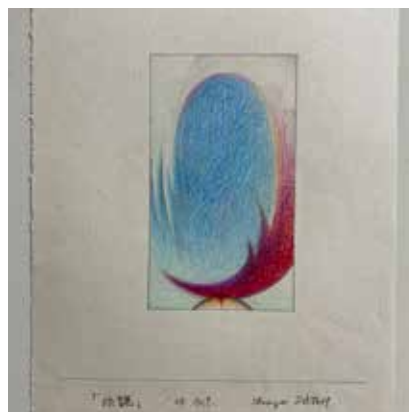
「伝説」



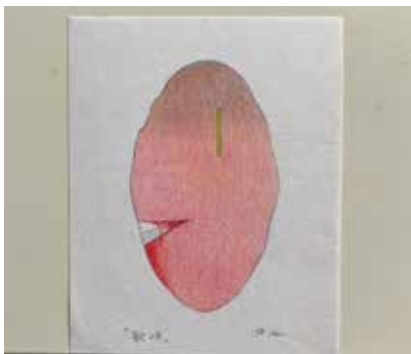
「伝説」 '01 July.



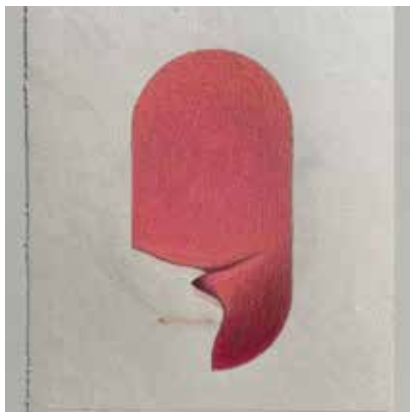
「伝説」 '08 Oct.



「伝説」 '08 Oct.



「歌垣」 '98 Nov.



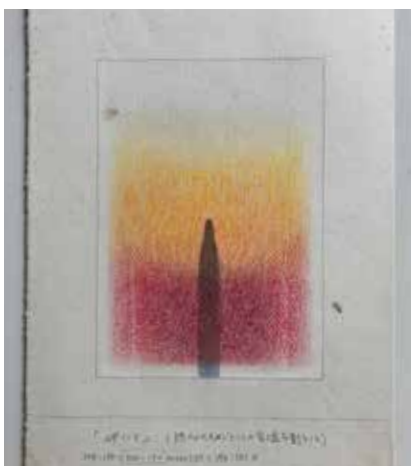
誰そ彼 彼は誰 (岬にてⅢ) '08 Sep.



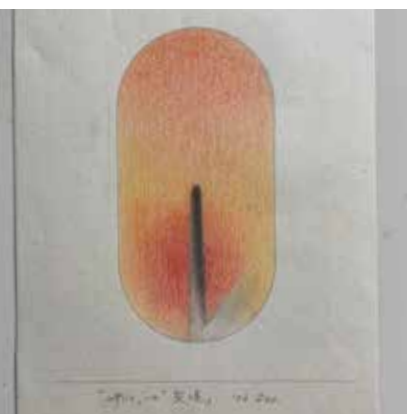
「生命・循環」 '98 Sep.
paradigm (模範) —model



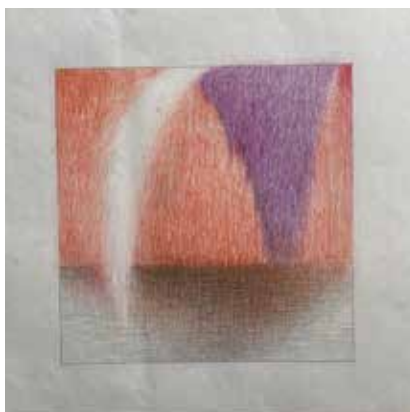
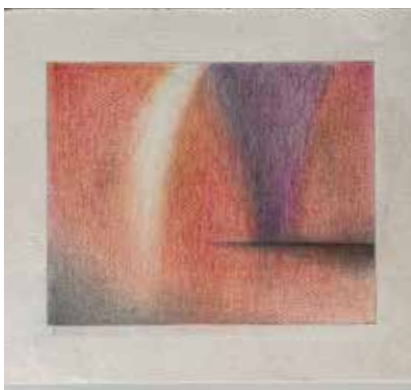
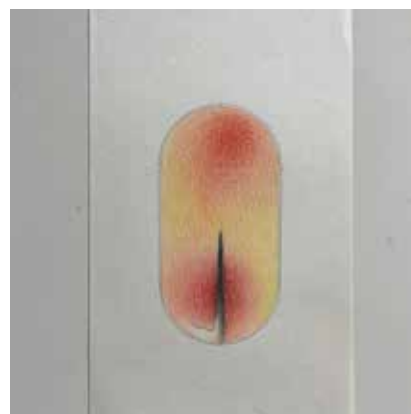
縦 170 × 横 190
174 × 186 くらいで
(正方形にしようとした世界が枠の中で閉
じてしまう) (下をカットアウトしたのに対
応して切れた上に余白を感じさせる為)



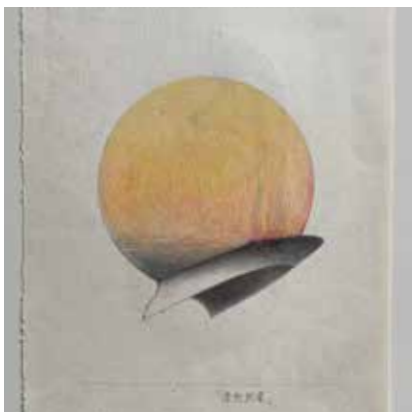
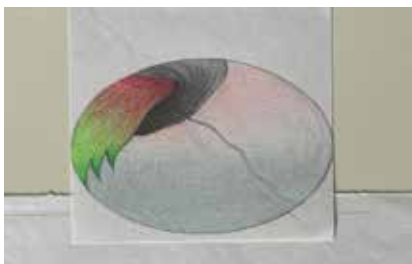
「岬にて」
(隠されたイメージとしての空堤を影として)
 $254:180=240:170=120:85 \div 194:137.4$



「岬にて」 → 「突堤」 '06 Dec.

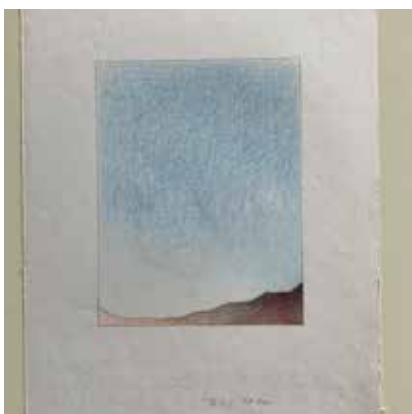


「岬にて」 '94 July

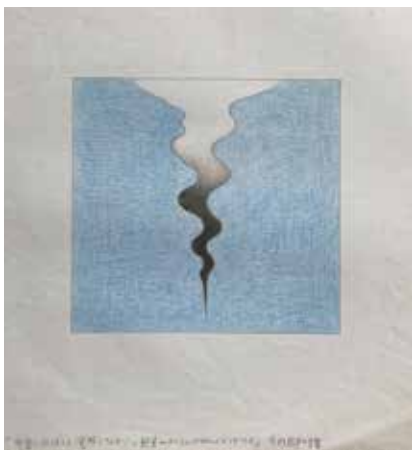


「赤色巨星」

20:28 ÷ 64.3:90
21:14.9=28:19.87 90:64=73:52



「空へ」 '97 Dec.



「宇宙に向かって演技しなさい。観客やカメラに向かってではなく」 今村昌平の言葉





「ホモサピエンス」 '94~'95



'01 Nov.



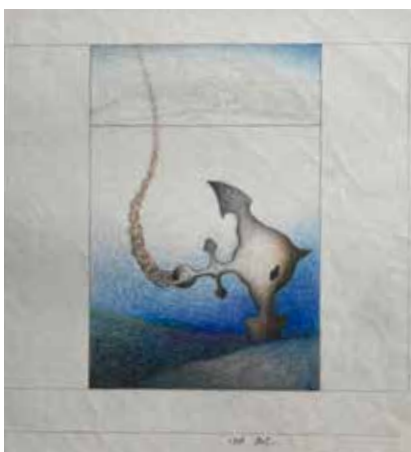
風景画家 '97.Janu



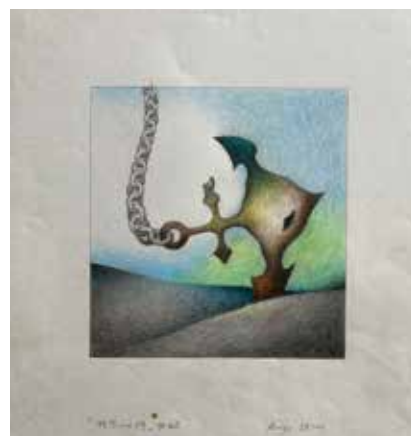
讃歌 '92・秋



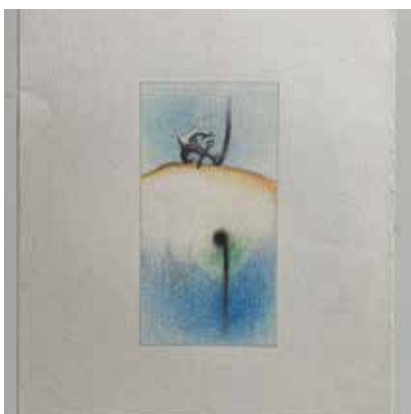
「讃歌・天に昇りし妻へ」
'93 Feb.



'94 Oct.



「時空への門」 '95 Oct.





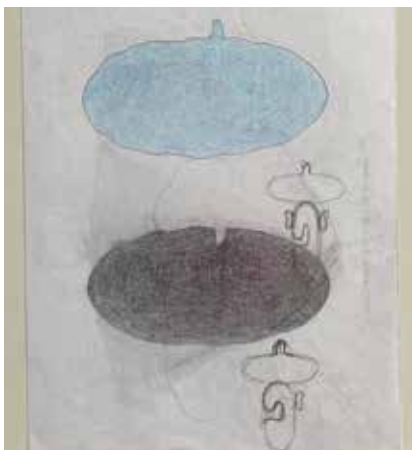
暗雲（雲沸くところ・敲） '93 Dec.



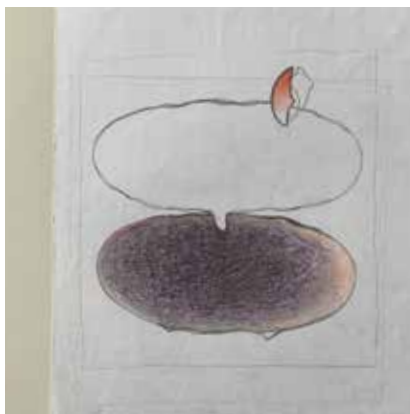
182.5 x 149.5 161.5 x 132



「雲沸く処Ⅲ」 '94 July



「躁鬱の谷」 '08 Oct.



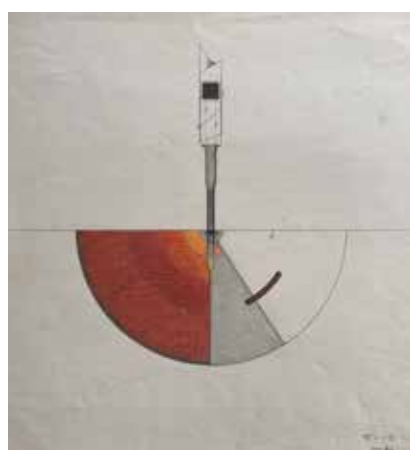
「躁鬱の谷」 '08 Dec.



「躁鬱の谷」 '08 Oct.



「躁鬱の谷」 '08 Dec.



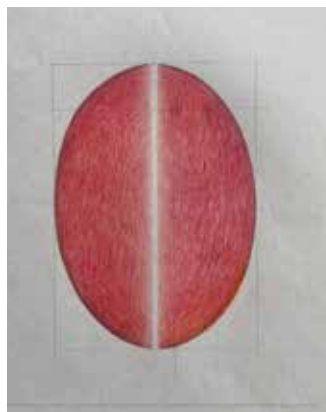
“無から無へ” 地軸

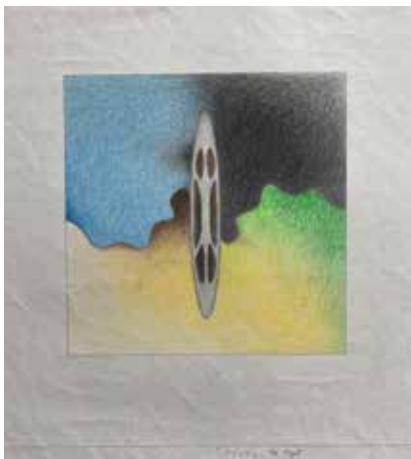


地軸 あるいは神ノ手



黄昏の星への捧げ物「昼の月」





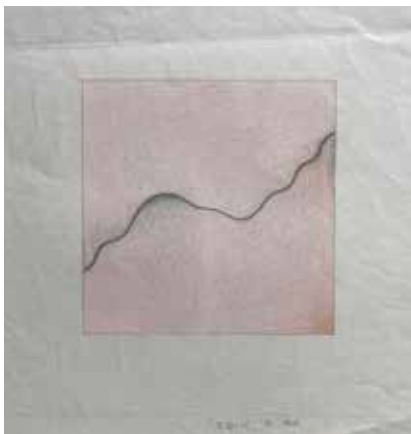
「ブリッジ」 '94 Sept.



「ブリッジ・敲」 '95 March



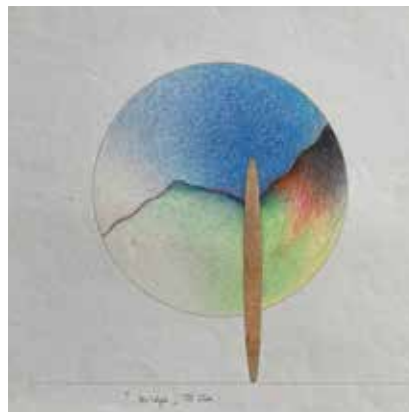
「橋」 '09 Sep.



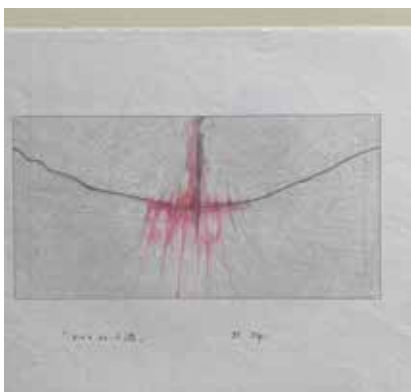
生命の河 '94.Oct



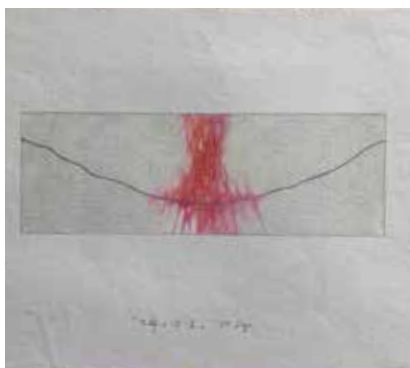
「春」



「Bridge」 '98 Jun.



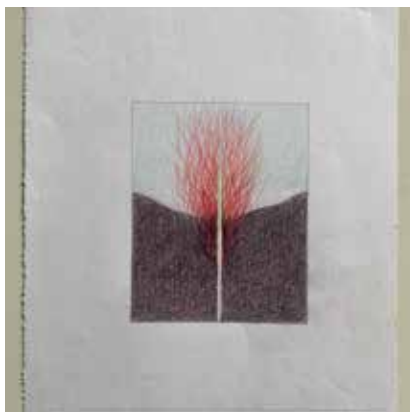
「カルマ あるいは遊」 '98 Sep.

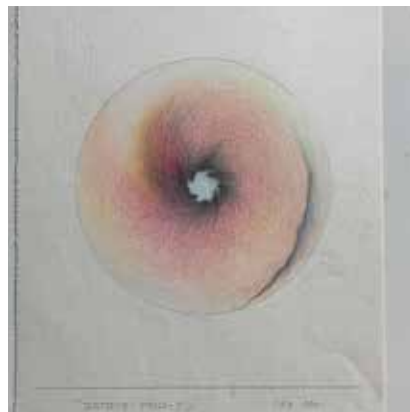
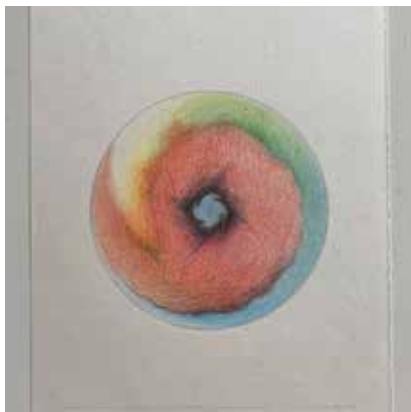
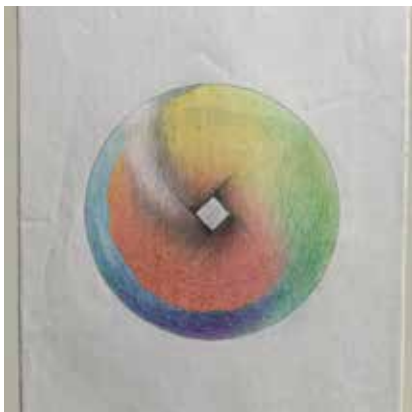


「生命の河・Ⅱ」 '98 Sep.



「根の口」 '98 Jun.





「エピローグ・プロローグ」 '03 Nov.



「淵」 '01 Oct.



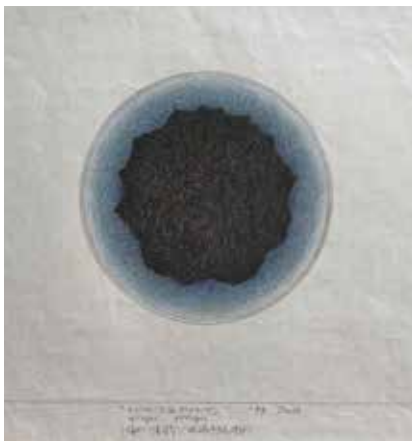
「エピローグ&プロローグ・誘惑」 '99 June



「エピローグ&プロローグ」 '91 Sept.



「落日」 '06 Sep.

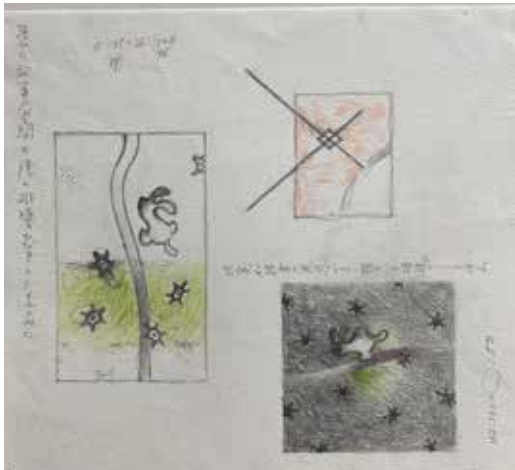


エピローグ&プロローグ '94.June
epilogue prologue
(締めくくり表現部) (発端予告表現部)



天の樹 '96.Nov.



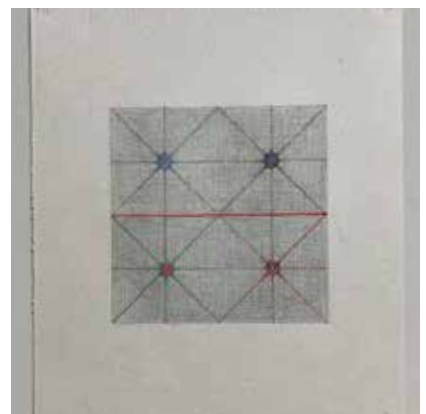


「閃光」

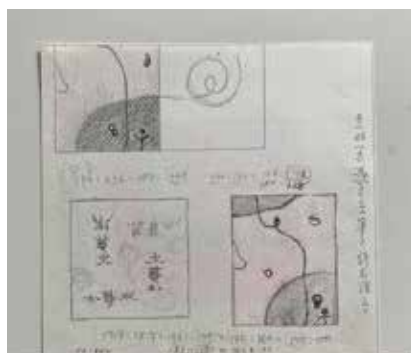
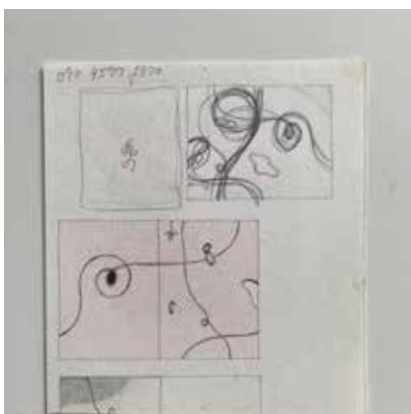


ファイナレは
カタストロフか
ひまわりは
押し問答の
世界一蹴

落水に放置の谷間片蔭の掛桶のひびきただそれのみに
泥亀が勝者兎息わきに視ていま横超のころばえ



「曙光・魑魅魍魎」 '08 April



きつねつき憑きもの落ちて詩も消えて





「黄昏の星」 '91 May



「黄昏の創生記」 '95 Sep.
193 × 210



'96 Jun. ・死滅と再生へ循環・オブティズム、ペシズムの同時存在、エロス・タナトスの共時性

※実制作では全体的にもう少し暗く、それはただ見かけの荘重さをえることなく、空間生と物質生のうまいコンビネーションでメリハリをつけるように。



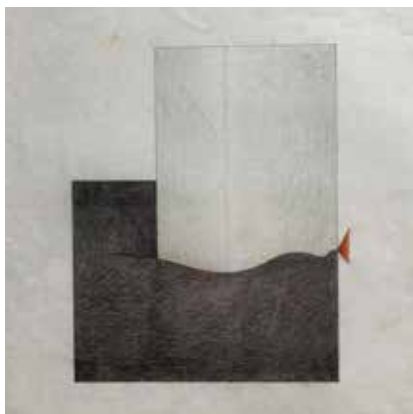
天の水 '95.Janu`Feb.



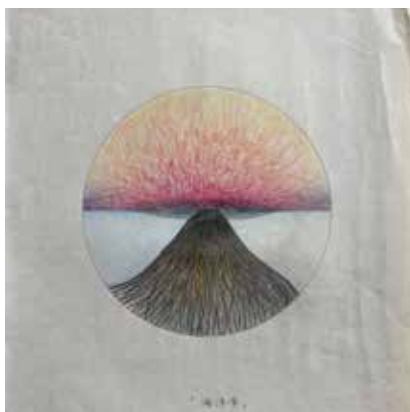
「四位一体説・発光」 '06 Sept.
宇宙的気の漲るベース場・混沌としての
む・差し懸かるエネルギーとしての白光・
生まれ広がる生命態



「一つの紡錘形のためのトライアングル」
'93 May.



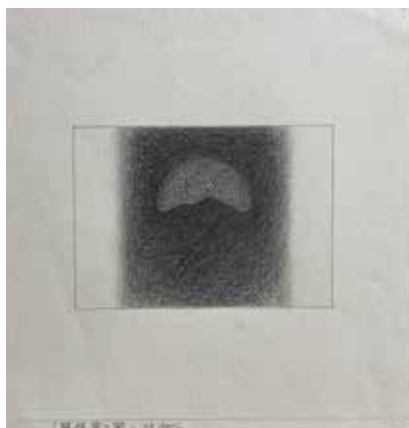
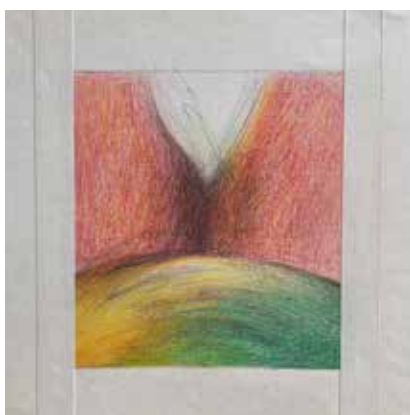
「四位一体説」 '94 Sept.



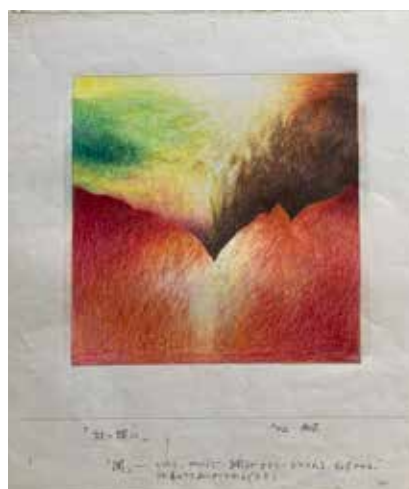
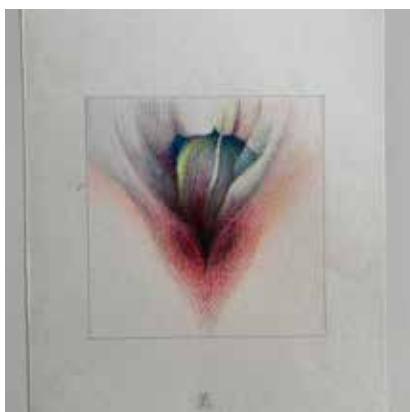
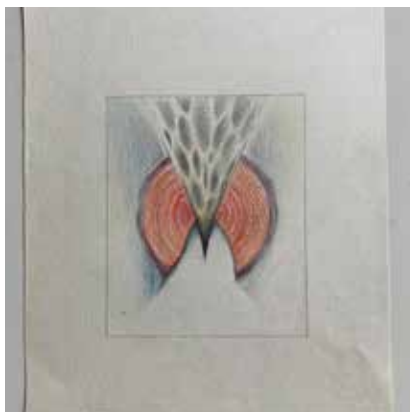
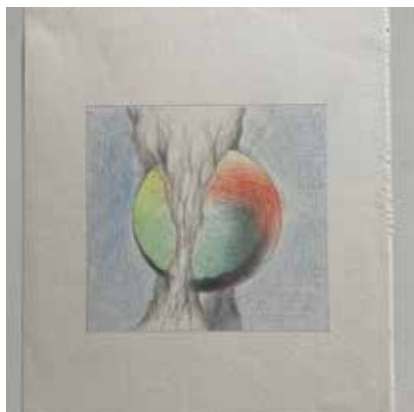
「海洋学」



「無充滿する」 '07 Dec.

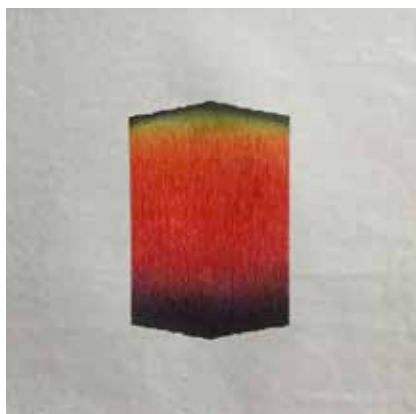


「既視感の闇」 '08 April



「秋の調べ」 '02 Oct.
「調」 — ととのう・やわらぐ・調子がそろう・
ととのえる・和合させる・物事のつりあいにと
れる(とる)

「菫」亥??門



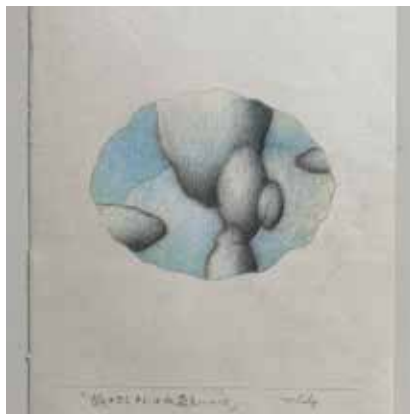
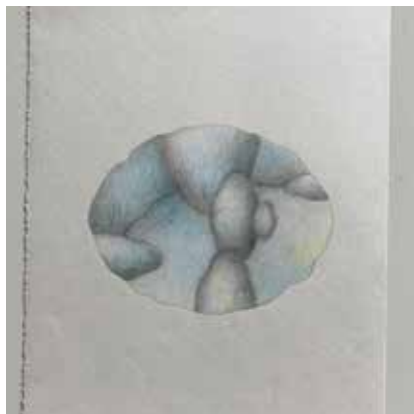
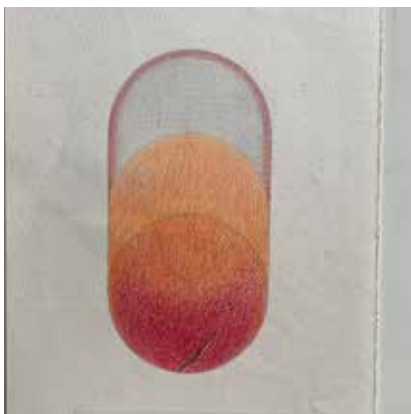
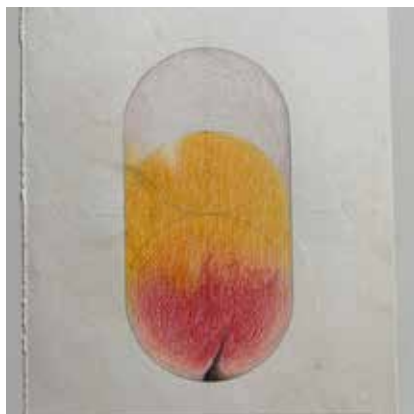
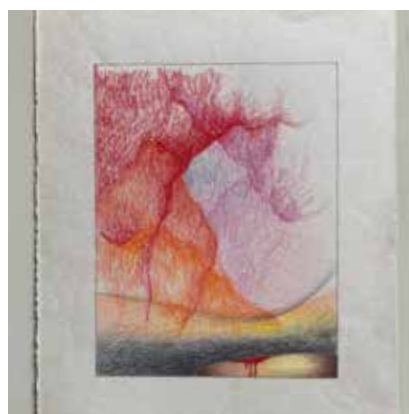
「色」 '94 June



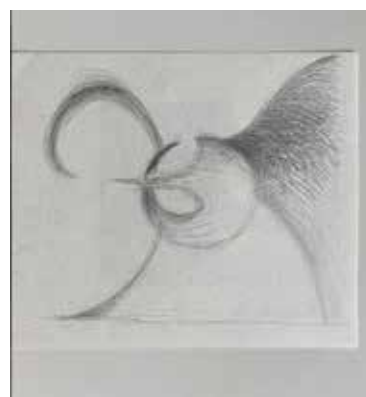
「レクイエムⅢ・揚羽」 '93 May

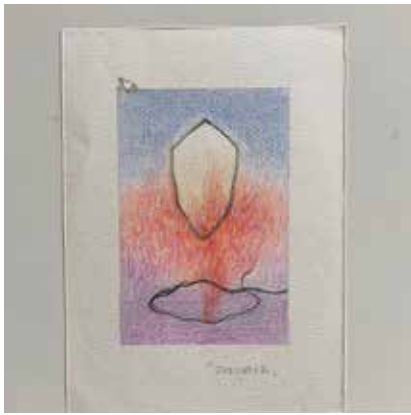


「虹の大地」
胸壁の断 崖虹は 空から空へ



「空のかたち あるいは水蒸気について」
'01 July

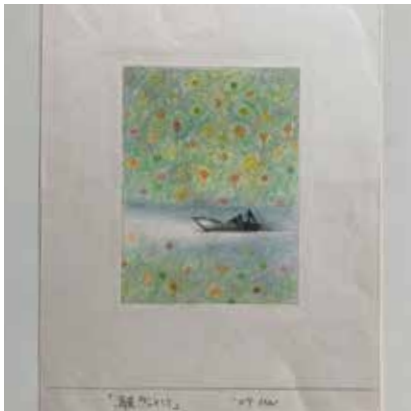




「女性と母性」



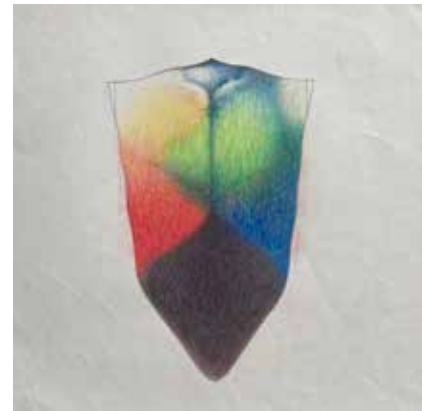
「緑色の海」 '94 Spring



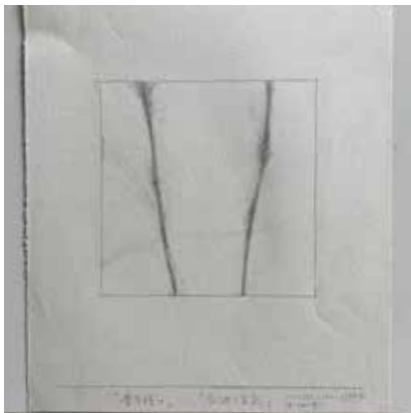
「騒然として」 '07 Nov.



「胸壁」
白日の光をうけて 煌々と輝くように



「風景のトルソ」 '95 Sept.



「春を待つ」「うごめく大気」



「訝」 '99 Jan.

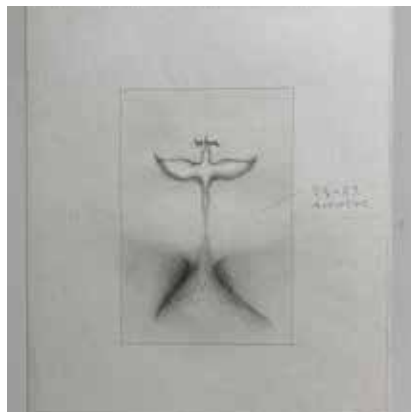
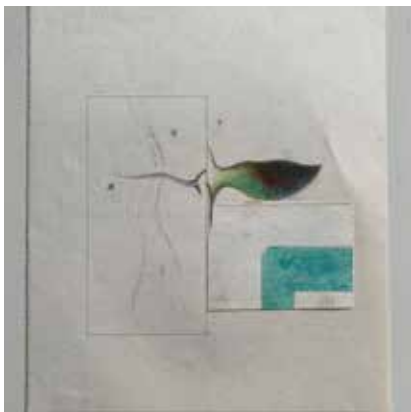
概念・理屈として造形的に成立したとしても、それが全ての他者としての初対面の観賞者にリアリティーのある感じると云うものになり得ないならば、それは作者の一人よがりなものになってしまう。第三者の他者の眼差しで自分の造形を外から見る事が出来るかどうか？

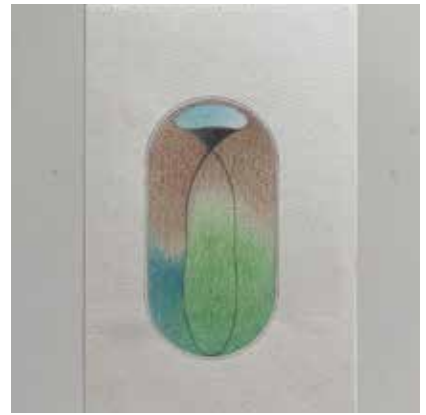
早春の空気
ぬるみはじめた

早春の少しぬるみ初めた空気のあたたかさ（ゆったりともやっている）に空は少し明るみはじめたあわい青みどり色（爽快・軽快感）川と岸はまだ凍りついた冷たさ。（しっとり感）

・感情的な劇としてではなく絵としては一つの事実として。
・それに依って描きながら何か視えて来るものがあるとしたらそれは何か？

全体が早春の大気の充満した空間の中の一つの出来事である。





「草炎」 '02 Oct
いずれ全ては焼滅す 燃え上がる
195 × 145
(虚空あり) やがてすべては燃え上がる

墓標



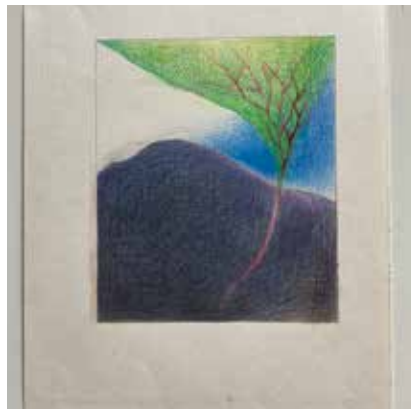
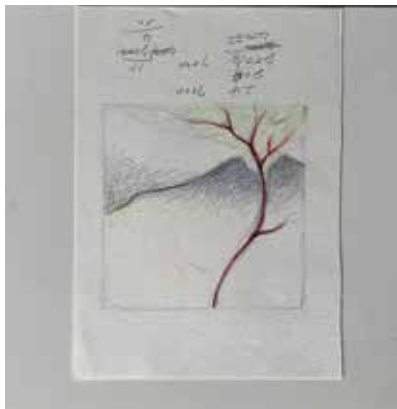
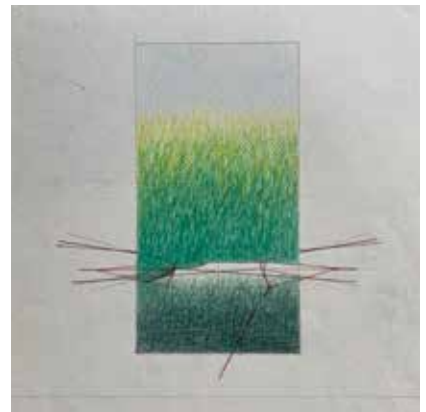
「紫火」



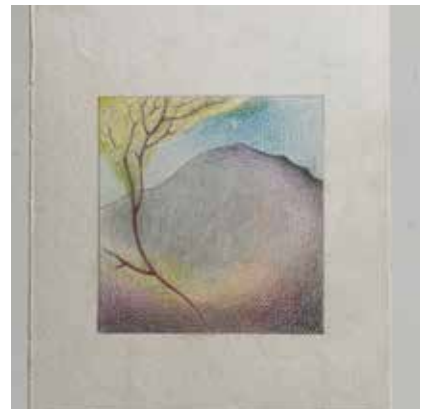
「夏草」 '97 Janu.



「夏草」 '95 Sept.



Metaphor





「花」 '07 Nov.



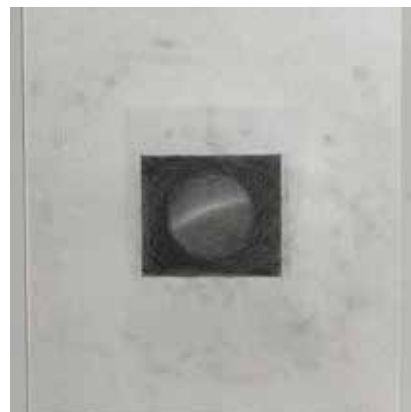
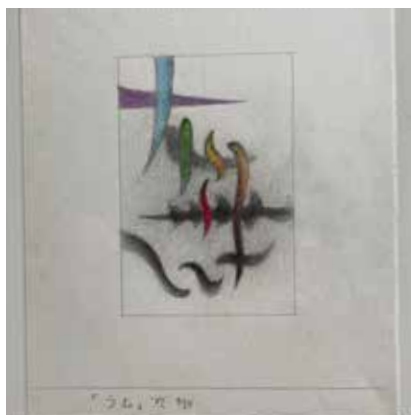
「うむ」 '07 ?



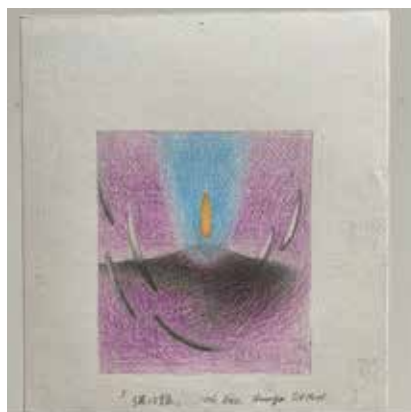
ライバルは自分
コツコツより全力投球
否定語はタブー
最後まで勝つとは思わない



「ミロ讃 あるいは絵の雲古」
'08 April



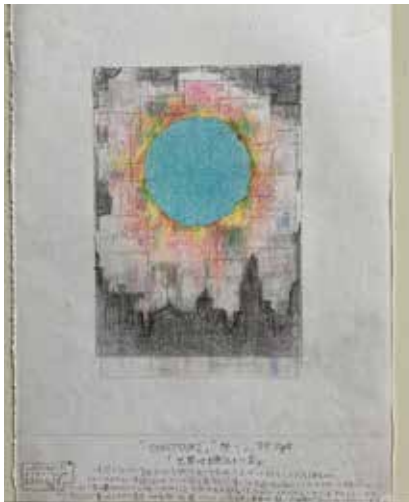
誰そ彼の光のしじま彼は誰か
黄昏のしじまの光り彼は誰か



「彼は誰」 '06 Dec.

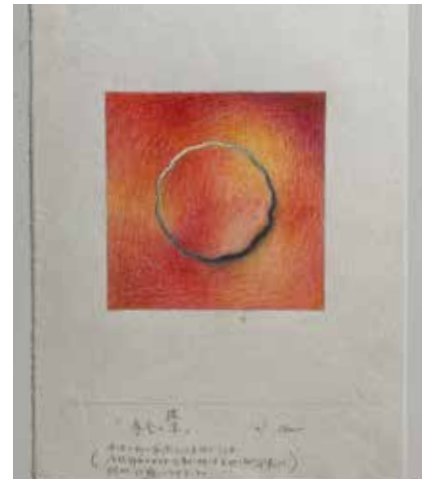


彼は誰



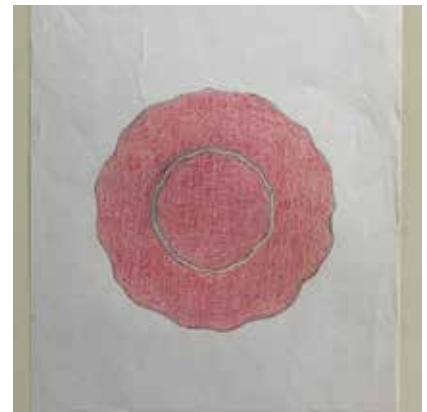
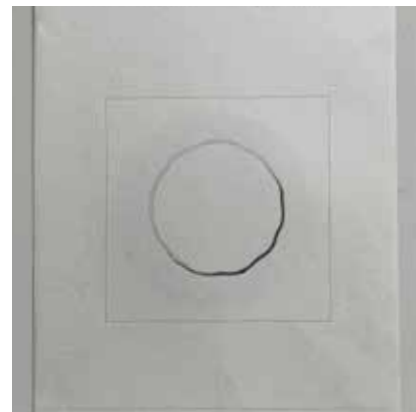
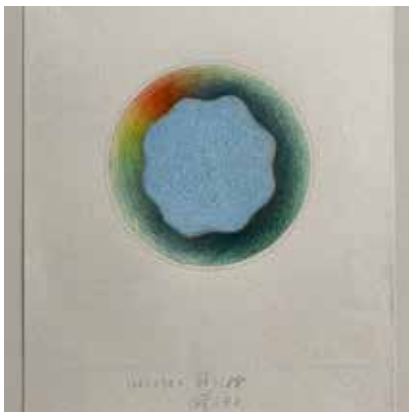
「OMATSURI」 「祭り」 '97 Sept.
「世界は燃えている」

【ひねりの効いたアイロニーとしての否定的表現】
峻線の向こうの青空だけを残してあとは全面広告ばりにすると云う方法もあるが、それではあまりに当り前と云うかただの受け身の風景（しかも通俗的な）にしかない（安物のアイロニー）のでもう一步踏み込んど云うか、一ひねりして全面広告の壁を作った上で、その上からいかにもそれらしい少々ケバケバしたつくりものの青空それを取りまく黄・ピンクの山を描く喜劇的悲しさ→「まつり」と云うタイトルになる。



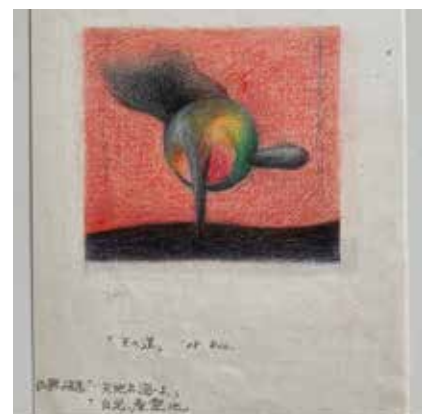
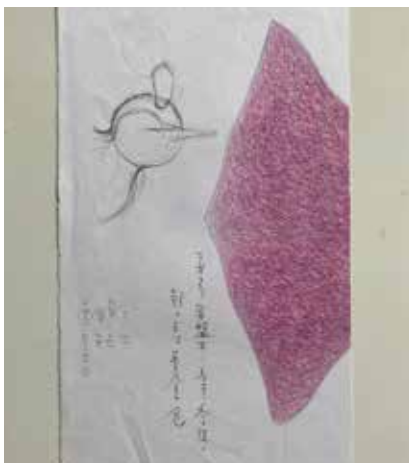
「黄金の道」 径 '01 Nov.

全体の形の取り方はこの方向で行き、尾根部分のかすかな光のつき方は天地180°回転して眺めた状態につけること。



峻岳を那辺したし？く知恵ぞ
'10 Feb.

「森」



下方より常盤木に差す冬の陽の朝の光は黄金の色

「落日」 '08 Aug.

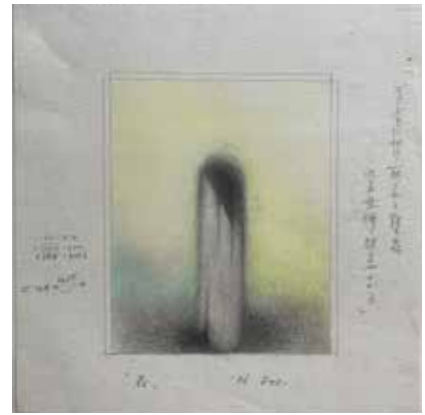
「天の道」 '08 Dec.
「天地よ海よ」「白光, 産霊, 他」



「大地の門」 '01 Sept.
「森の肖像」 '01 Nov.

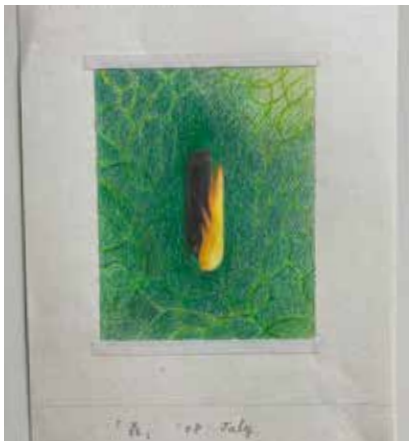
ベースとしての緑色は同明度にして、つる状、つた状、個別的な線描の植物形象と束になった線の部分の明暗の差で生命感を出す（緑の）方が自然であろう

ベースの線に明暗をつけると画面が不必要に歪みを生じてしまうだけ。

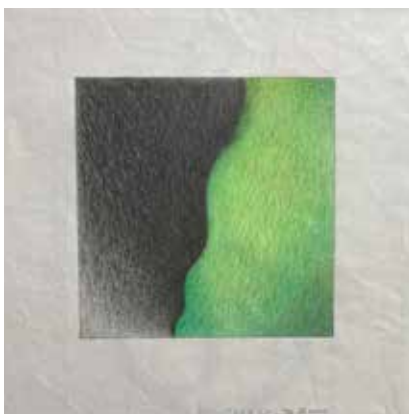
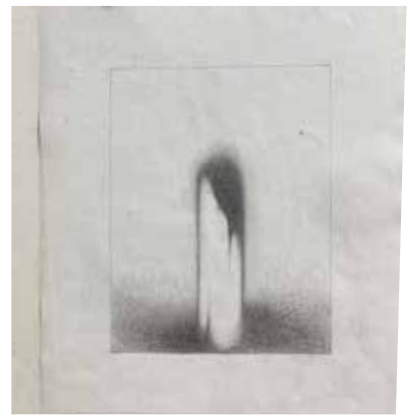
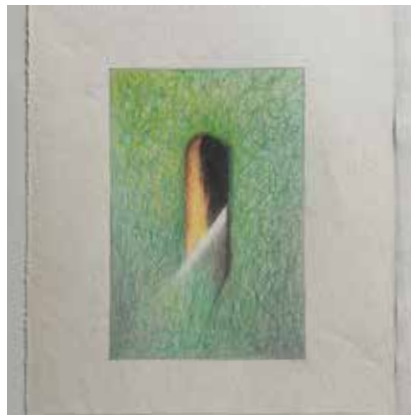


「森」 '06 Dec.

「スタスタに切り崩されて雑木森
空白無惨 朝もやかる」



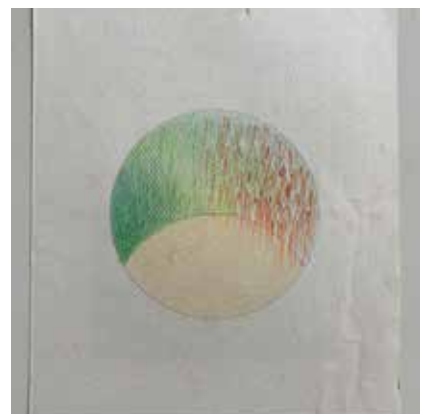
「森」 '08 July



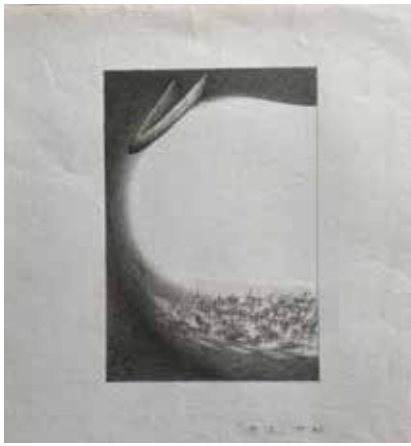
「うらおもて」 '94



水源地（夏）
石段は消す方向で（より絵画性が強くなる）
石段を描き込む（物語性が強くなる）



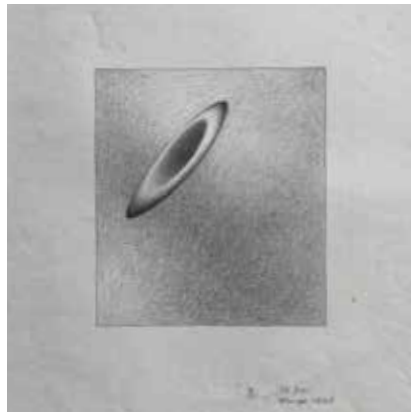
「種の起源」 '01 Oct.



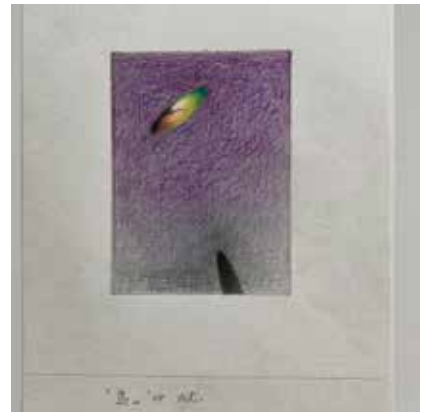
「漂流」 '95 Oct.



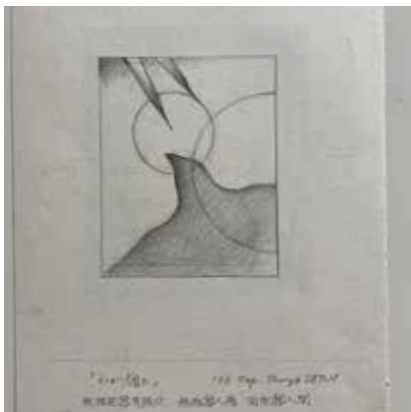
「瞑想」・鳥 '96 Aug.



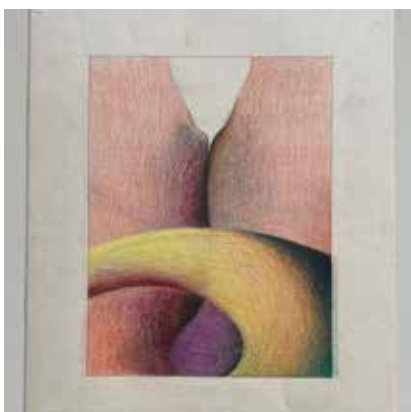
鳥 '96.Dec



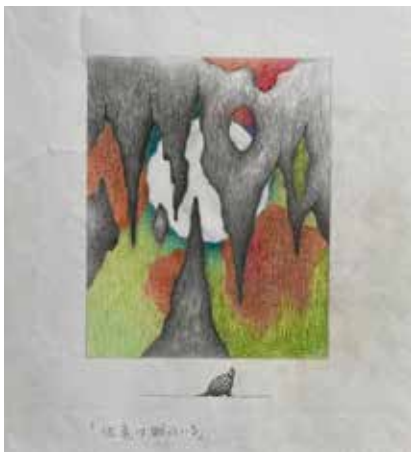
「島」 '08 Oct.



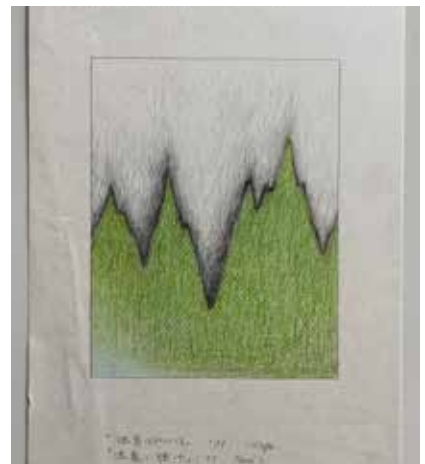
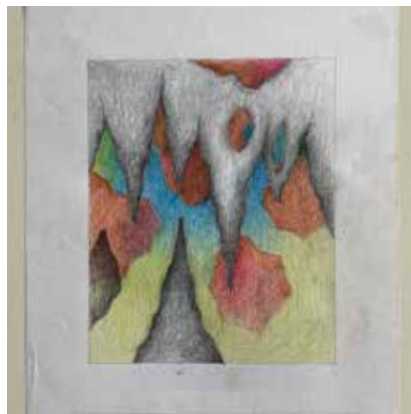
「わが領土」 '06 Sept.
無限定対有限化、無為対人為、自然対人間



'99 Nov.



「泥亀は知っている」



「泥亀は知っている」 '01 Sep.
「泥亀に聴け」 ('02 Jan.)



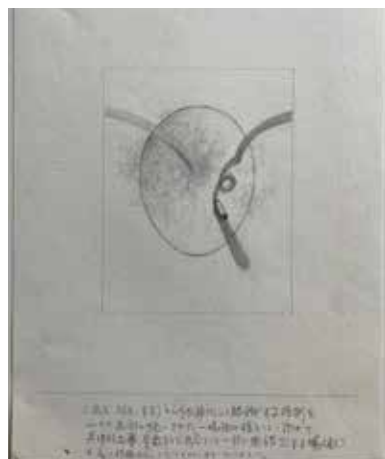
墓標



「木霊」 '99 Jan



「木霊」



（過去・現在・未来）という分節化して認識する時間を、一つの画面の統一された一場面の様として、尚かつ具体的な事、具象的な絵として一目で感得出来る場（劇）
※端に情緒的にさびしくなりすぎないように。



幾百、幾千年と無数の死を受けとめ、性をうながして未だ大地、そこに純白十字の花弁と黄色い花芯を持つ可憐無垢な何よりそのどくだみの花の持つ発するちからとしか言いようのないようなある感受性を大切に、それをなんとか定着させること。
あと絵をどう受け取るかは観賞者に任せること。

（現 195 × 156） 162:130=196:157

白・黄・緑／灰・黒・紫・赤



「コロニー」 '10 July

「樹」 '02/'10 Feb.